

平成25年度教師海外研修(ラオス) 研修報告書

学 校 名	岐阜県立岐阜商業高等学校	氏 名	和田 さとみ
-------	--------------	-----	--------

1. 印象に残る写真2点

● 「ラオスの救世主「ミミズ」」



「ミミズ」の特性を生かした、生ゴミ処理法。環境に優しくコストレス、さらには持続の可能性を秘めているこの「ミミズコンポスト」は、まさにラオスゴミ問題の救世主になると確信した！アイデアに目から鱗が落ちた。

● 「ラオスの心」 後世へ、そして世界へ！」



家族や友を何よりも大切にするラオス人。その象徴である「生命の樹」を描く職人に紙漉のサンコン村で出会った。伝統工芸にラオスの心を乗せて後世へ、そして国境を越えて世界へと伝えていこうとする姿に心を打たれた。

2. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

国際理解教育については以前から非常に興味があり、授業時間を使ってこれまで訪れた国々を生徒に紹介をする、といった活動は以前から行っていた。しかしそれは生徒にとっては「異文化を知る」とどまる程度のもので、もっと教育的に踏み込んだ内容の授業（世界の現状を「知る」→課題に「気づき、考える」→自分のできることを「実行する」）をいつか行いたいと思っていた。この現地研修は、まさにその手法を参加体験型

で学ぶことができる絶好の機会となった。現地研修では、ラオスの暮らしや社会を実感することはもちろん、JICA等の国際協力機関で働く人々の生の声を聞く機会があり、国際協力の現場を体感することができた。現地ではとても10日とは思えないほど、ラオスという国を広く深く知ることができた。さらに参加者の「学びの柱」が常にぶれないよう研修の企画運営を担っていたNIED・国際理解教育センターによる細かな配慮があり、そのおかげで濃厚な学びの時間を過ごすことができた。期待以上の成果が得られた。貴重な体験ができたことを本当に感謝したいと思う。

3. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど）

（1）柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

現地研修に参加するまでは、恥ずかしながらラオスについて無知だったが、研修を通じてぼんやりとラオスの像がみえるようになり、実際ラオスに足を踏み入ると、そこには自分が想像していた以上の多様な世界が広がっていた。事前研修においては、ラオスの歴史や社会情勢、産業などの予備知識を蓄え、また開発教育指導者研修を通して、世界の多様性を受け入れるための器を自分の中に作っておくことができた。そのおかげで現地では、とても10日間とは思えないほど、余すことなく様々なラオスの姿を多角的に捉えることができたと思う。事前の研修は必修である。同じ経験でも質がかわると思う。そのことを実感した。そしてラオスの人々との出会いや交流はラオスを体感する上で欠かせない要因となった。街の至る所で見られたラオスの人々の温かな眼差しは、たとえ言葉が通じなくても、とても好意的で嬉しかった。ラオスに流れるのんびりとした雰囲気にもまた、心癒された。

（2）柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

私が所属する「暮らし・生活」チームでは、現地で様々な世代の人々に一日の生活リズムについてアンケートを行った。そこで数を重ねていくうちに、あることに気づかされた。子どもたちは朝晩に必ず家の手伝いをし、働きに出る若者たちは家族が全員揃うまで夕食を食べず、また主婦層は毎朝4時起きで主食である餅米を家族のために準備する。つまりラオスは何より家族の時間を大切にしている、ということだ。どの世代も生活の中心にあるのは、家族だった。ふと、かつて父が幼かった頃の話思い出し、こんな時が日本にもあったのではないかと頭をよぎった。高度経済成長時代の恩恵として日本人の生活は便利で豊かになった。その恩恵の代わりに今や日本はどの世代であってもそれぞれが時間に追われながら多忙な日々を過ごしている。そしていつからか家族の存在はどちらかというと後回しになりがちになってきているように思う。アンケートから今一度自分の家族について振り返る機会をラオスの人々は与えてくれたと思う。

（3）柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

この10日間、街や村、市場といった至る所でビニールゴミや生ゴミが行き場を失ってそこに放置されている所を何度も見かけた。ラオスはまだ地方自治体が十分機能していないようだ。よって国がJICAをはじめとする国際協力支援機構とタイアップして、少しずつ廃棄物処理に関わる社会構造を作りつつあることを知った。その中で視察させていただいたラオスパイロットプログラム環境コンポーネント(LPPE)の取組みの一つに「ミミズのコンポスト」があった。ミミズの性質を利用して生ゴミを土に変えるといった画期的なりサイクル方法

だ。私が魅力を感じたのは、環境によいこと、現地の物資を最大限活用していること、低コストであること、そして持続の可能性を秘めていることだ。このやり方はラオスにとっても適していると感じた。しかし日本も同じようにラオスの方法を 100% 適応するのは違うように思う。日本には日本の特性があってそれをこのラオスのようにうまく適応させる必要があると思った（最後に自分がゴミに対してこんなに熱くなるとは思ってもよくなかった）。

4. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

現地研修では、教育はもちろんのこと、環境・福祉・医療・スポーツなど、幅広いラオスの姿を、自分の五感を最大限使って感じ取ることができた。教育はこれら全ての分野に関わることだと思う。よって幅広くラオスにおける JICA の国際協力事業を視察させていただいたことは、本当に貴重であり勉強になった。今後もぜひ、教育現場のみならず、今回のようなさまざまな分野の視察訪問を組み入れていただけるとよいと思う。

また現地で頑張っている青年海外協力隊の活動を見聞きする中で、自分自身が良い刺激を受けた。JICA 事業に興味を持ったことはもとより、これから未来を生きる子どもたちにしっかり伝えていかなければいけないという使命を持たた。

今後はぜひこの現地研修参加者の互いの授業参観ができる機会があるとよいと思う。それぞれの参加者が現地で感じたことはそれぞれであり、授業をどのように構成し、実施するのかはとても興味深い。

5. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

【持ち物】

- 必需品：① Dengue 熱対策として電池式蚊取りマット（部屋用）、塗るタイプ、ミストタイプ、ジェル（私は朝にジェルを使い、ミストタイプは洋服に、塗るタイプは常備用として3種類のそれぞれミニサイズを使い分けていました。塗るタイプは手を汚さないのがオススメ）ミニで十分です。
- ② お腹の調子を整える意味で、ドライ納豆、乾燥梅干しには薬代わりとして助けられました。お腹を壊さずにすみしました。
- ③ 折りたたみ式エコバック、何かと便利。環境のために買い物をして、なるべくビニール袋は断るようにするといいですね。
- ④ コンセントプラグ（C型）、日本のものは使えません。2口つなげるタイプが便利でした。
- ⑤ サンドルは、風呂を出たときに使いました。スリッパでもいいと思います。
- ⑥ 洗剤・洗濯ばさみ…私の場合、衣類は3セットで十分。しかし最終日を除き、毎日洗濯をしました。ホテル（ビエンチャン、ルアンプラバン）でも安価（300円くらい）でランドリーが頼めます。（しかしサヤブリーはいつランドリーができるか分からないとのことで依頼は無理でした！）帰りはお土産で重量を気にしないといけなないので、日本から持って行く物は必要最低限で十分です。私は山登りが趣味ということもあり、常に研修中は山の服を着ていました（よく乾くし助かります）。

便利品：① 日本のあめ・お菓子…托鉢の時に坊さん（特に小坊さん）に渡せる。また、天候・道路状況で急遽食事が取れない時に非常食として助けられました。研修メンバーで分け合いました。

②懐中電灯…時に停電になるので。今年はショッピングモールで停電になりました。

【必要な準備】

ラオスでは英語がほとんど通じません。基本的なラオス語を事前に調べて言えるようにしておくといいです。「こんにちは（サバイディ）」、「ほんとにありがとう（コプチャイ・ライライ）」、「どういたしまして（ポペニャン）」、「写真撮っていいですか？（タイフー・ダイポー？）」、「いくら？（ラーカー・ダオダイ？）」はよく使いました。ラオ語を使うとぐっと現地の方に近づけます。

【学びの視点】

事前研修でグルーピングされたテーマがあるので、それに沿って写真や情報を収集できるといいです。私は環境（廃棄物）の担当だったので、現地ではあらゆる場所のゴミ箱やゴミの写真を大量に撮りました。また、事前にグループで考えたアンケートは、現地の隙間時間を見つけてお店の方や村の子どもたちに聞いて収集しました。（訪問先でも何度か交流の時間をとっていただけました。）

【注意事項】

これは、同行していただいた通訳さんのアドバイスでしたが、ナイトマーケットなどの市場で「値切る」ことをしましたが、現地の方の最低限の生活費があるので、だいたい値切っても20～30%までにしておくといいです。ラオスの方は日本人だからと言って、ものすごい値段をふっかけてくることはなかったです。

6. その他全般を通じての感想・意見など

この研修では、ラオスの都市部の様相から村の様子までを深く知ることができた。また、首都から村へ、そしてまた同じルートで都市部に戻るルートをたどったため、折り返しからは初めて降り立った首都のイメージとはまた違う感覚や発見を得ることができた。またラオスで活躍する日本人の方々との交流を通じて、大変よい刺激を受けた。研修場所は多種多様で、JICA 事業を中心にラオスの様々な側面（教育、福祉、環境など）を知ることができた。自分が期待していた以上の経験を得ることができた。

研修自体は、企画運営を担っていた NIED・国際理解教育センターが中心となって作成していただいたワークシートや事前の担当グループがあったおかげで、現地では自分は何の目的を絞って写真撮影や情報収集をしたらよいかという、学びの視点を失うことなく現地で時間を過ごすことができた。そのため通常の「旅」では得られない貴重な時間を過ごすことができた。事前準備は大変だが、欠かせないことを改めて実感できた。研修としては、とても質の高いものだったと思う。JICA あつての研修であり、同時に NIED あつての研修だとも思った。JICA&NIED はベストパートナーだと思う！ぜひこれからもこういった学びの機会が教師の間で増えていくとよいと思った。

以上